

人形浄瑠璃文楽を題材としたデザインワーク —文楽絵本「生写朝顔話」の製作—

川守田 礼子[†]・栃木 美祐^{††}

Design work on the subject of Bunraku puppet show -Production of Bunraku picture book "Sho Utsushi Asagao Banashi"-

Reiko KAWAMORITA[†] and Miyu TOCHIGI^{††}

ABSTRACT

In this production, as one of the goods for telling interesting story of Bunraku puppet show and its characteristics as a performing art, Bunraku picture book was made. The play "Sho Utsushi Asagao Banashi(The Tale of the Morning Glory)" was taken as the subject.

Key Words: Bunraku puppet show, design work, picture book, Sho Utsushi Asagao Banashi

キーワード: 人形浄瑠璃文楽, デザインワーク, 絵本, 生写朝顔話

1. はじめに

人形浄瑠璃文楽（以下、文楽）は、歌舞伎と同様、江戸時代に成立した日本の伝統芸能である。太夫の語りと三味線の演奏による浄瑠璃（義太夫節）に三人遣いの人形が結びついた芸術性の高い人形劇である。しかし、歌舞伎や落語などに比べ、文楽はメディアで取り上げられることが少なく一般的認知度は低い。また特異な上演形態などから直接鑑賞の機会も限られている。それでも伝統芸能愛好者であれば主体的に鑑賞体験や情報収集を行えるが、伝統芸能初心者、特に若年層が興味を持つ機会に恵まれて

いない。気軽に文楽に接することができる場や商品はまだ少なく、デザインという観点から考えてみる余地は大きい。八戸工業大学川守田研究室では、平成28年度より文楽を紹介する公開講座「文楽はちのへ塾」を継続開催してきた。本稿では、その取り組みの一環として展開した文楽を題材としたデザインワークについて報告する。なお、本製作は、八戸工業大学感性デザイン学部感性デザイン学科科目「卒業制作・論文」として同学科4年栃木美祐が行った。

2. 事前調査と作品コンセプト

はじめに、事前調査として劇場での鑑賞体験を行った。文楽の定期公演は、大阪の国立文楽劇場および東京の国立劇場小劇場で行われている。今回は東京国立劇場の9月文楽公演第一部『生写朝顔話』を鑑賞した。鑑賞してみると、子供向けの人形劇とは異なる物語の力に驚く。

平成30年1月9日受付

[†] 感性デザイン学部感性デザイン学科・准教授

^{††} 感性デザイン学部感性デザイン学科・4年

複雑な人間関係、社会構造をもたらす悲喜劇が人形によってリアルに描かれる。物語を通して提示される普遍的な人間感情は現代人にも共通するものである。特に『生写朝顔話』は若い男女の純愛を主題としており、若年層も理解しやすく共感を得やすい作品であった。

しかし、実際に鑑賞していると、初心者が文楽を楽しむうえで二つの壁があることに気づく。

一つ目は文楽の特殊な上演形態により、舞台から得られる視覚情報・聴覚情報が錯綜し、鑑賞者が戸惑ってしまうことである。文楽は、人形遣い、太夫、三味線の三業によって成立する舞台芸術である。なかでも特徴的なのは、一体の人形を三人で操る三人遣いである。これにより人形の豊かな演技が可能となるが、人形が主役の人形劇にとって人形遣いは裏方のイメージが強い。他の人形劇では人形遣いは舞台上には姿を見せず（もしくは鑑賞者の鑑賞フレームの外に位置し）、鑑賞者が人形の演技に集中できるよう工夫されている。しかし、文楽では人形遣いが堂々と人形の背後に登場する。文楽を見慣れない鑑賞者はこの点にまず違和感を覚える。さらに、床というもう一つの舞台に太夫と三味線弾きが登場し、物語を語る。ナレーションと音楽という聴覚情報を担う役割もまた通常の演劇では裏方のイメージが強いが、文楽では太夫と三味線弾きのパフォーマンスは大変目立つ。よって、二つの舞台から発信される視覚情報・聴覚情報が複雑に絡み合い、「どこを見ているのが正解なのか分からない」「物語に集中できない」という戸惑いを初心者に生じさせる。

二つ目は浄瑠璃の文言を聞き取ることが難しいことである。江戸時代の大坂弁が現代人には分かりにくいのに加え、太夫は浄瑠璃（義太夫節）という独特の節で語る。これに三味線の伴奏が加わり、音楽と情景描写と登場人物の台詞がまじり合い、それぞれを聞き分けるのが初心者にとっては難しい。床本という浄瑠璃冊子が入手でき、劇場では字幕が表示されるが、「どこを見ればよいのか」という初心者の課題が増え、鑑賞時の煩わしさにつながってしまう。

こうした初心者が文楽に対して抱く情報の混乱は鑑賞を重ねることで克服されるが、文楽作品が持つ物語力の受容を阻んでいるのは事実である。初心者により分かりやすく物語の魅力を提示できるアイテムが必要だと考えた。

では、劇場では鑑賞者向けにどのような商品が販売されているのか、東京の国立劇場内で調査を行った。劇場内の販売コーナーでは、公演パンフレット（国立劇場文楽公演解説書）のほか、来場者向けのさまざまなグッズや書籍が販売されている。書籍は、専門家の解説本や芸芸員の芸論、写真集、研究書、上演資料などが主で、初心者には内容が難しい。初心者向けの書籍としてあらすじ集が数種類見られた。グッズとして人気の高いものには、絵葉書、クリアファイル、一筆箋などの文具類が多い。キーホルダーやトートバッグ、Tシャツなど新たな商品展開も見られるが、いずれも作品の名場面や主要なキャラクター（人形）をメインにしてデザインされたもので、物語の内容を伝える要素は少ない。現状として初心者の鑑賞補助的役割を果たすグッズ類はほぼ見当たらなかった。

そこで本製作では、初心者でも物語の面白さを楽しめ、かつ芸能としての文楽の特色も知ることができるグッズとして、従来の商品にはない文楽絵本を製作した。見て読んで楽しむ絵本としてだけではなく、鑑賞後にインテリアとして飾ることができるものを想定した。題材には今回鑑賞した『生写朝顔話』を選んだ。主題が絞られており、若い男女が幾多のすれ違いの末に結ばれるという恋愛ドラマは、現代の映画・テレビドラマ・漫画等にもよく見られ、特に若年層への訴求力が高い題材だと考えた。

3. 作品概要

絵本の構成は、太夫の読み上げる床本を分かりやすく現代語訳したテキスト部分と、物語の名場面を切り絵で表現した挿絵部分からなる。形状はインテリアとして飾ることが可能なよう、

御朱印帳などによくみられる蛇腹型を採用し、美しく保管できる書帙を合わせて製作した。

テキスト部分は、「国立劇場第200回文楽公演解説書」の文楽床本集に基づき、文楽解説書や古語辞書を用いて一文ずつ現代語に訳した。深雪という主人公の娘が語る物語として再構築し、より登場人物への感情移入がしやすい仕掛けを施した。さらに、初心者でも理解しやすいように、物語把握に支障がない範囲で描写を削り、絵本としての文字数をおさえた。完成したテキストは和紙風のコピー用紙に印刷し、赤の蛇腹台紙に貼り付けた（写真1）。

挿絵部分では、実際の舞台の視覚情報を再現するため、人形、人形遣い、太夫、三味線弾きを切り絵で表現した。切り絵を採用したのは、蛇腹型の構造を活かし、人形と人形遣いを透かし絵で見せるのに最適な手法だったからである。まず画用紙を半分に折ってずらしつつ張り合わせ、絵本台紙となる蛇腹を作る。厚い和紙を用いて人形と人形遣いそれぞれを別々に切り絵で表現し、間に薄い和紙を差し込んで台紙の張り合わせ部分に挟むことによって挿絵1ページ分が完成する。絵本として開くと場面に沿った人形の切り絵のみが見えるが、絵本を光にかざして見ると、人形の背後に人形遣いが透けて浮かび上がるようにした（写真2）。テキスト部分を他のページに貼り付け、絵本本体は完成である。

最後に、書帙を製作した。フランスのカルトナーージュ手法を参照に、厚紙で箱を作り、表面に和布を貼り付け、耐久性と美しさを加えた。表側には絵本台紙の赤色が映えるように黒地の花模様を、内側には演目のクライマックス「大井川の段」にちなみ紺地の青海波模様の和布をそれぞれ用いた。題名は別布で作る書帙表紙に付した（写真3）。

写真4は完成した文楽絵本である。サイズは、書帙に納めた状態で縦17cm×横15cm×厚さ2.5cm、蛇腹の絵本本体は最長400cmである。通常の絵本のように1ページずつ開いて読むことができ、また蛇腹の絵本本体を屏風状に広げて展示することも可能である（写真5）。



写真1 テキスト部分



写真2 挿絵部分（透かし絵）



写真3 書帙



写真4 文楽絵本



写真5 展示例

4. まとめ

文楽を題材としたデザインワークとして、見て読んで飾って楽しめる文楽絵本の製作を行った。コンパクトなサイズに、文楽の三業と物語を詰め込んだ、従来のグッズにはない新しい商品提案ができた。今回は切り絵を手作業で行ったが、専用機械を用いれば量産も可能である。紙が主材料であるためコストも抑えられる。

課題は文楽独特の音声情報の反映ができなかった点である。絵本に義太夫節の音声要素を加味できなかった点、現代語訳の際に浄瑠璃らし

い言葉のリズムを十分に表現できなかった点が課題として残った。これらを検討しつつ、今後は他の作品の絵本製作にも取り組みたい。

参考文献

- 1) 国立劇場営業部宣伝課編集企画室：国立劇場第200回文楽公演解説書・文楽床本集，独立行政法人日本芸術文化振興会，2017.
- 2) 国立劇場：人形浄瑠璃文楽名演集 生写朝顔話・花上野誉碑，NHKエンタープライズ，2016.
- 3) 高木秀樹：新版あらすじで読む名作文楽 50選，世界文化社，2015.
- 4) 中本千晶：熱烈文楽，三一書房，2008.
- 5) 美篤堂：はじめての手製本 製本屋さんが教える本のつくりかた，美術出版社，2009.
- 6) 独立行政法人日本芸術文化振興会：文化デジタルライブラリー，<http://www2.ntj.jac.go.jp/dglib/>，最終アクセス 2018年1月8日
- 7) 河原久雄：人形浄瑠璃文楽，<http://www.lares.dti.ne.jp/bunraku/index.html>，最終アクセス 2018年1月8日

要 旨

本制作では、人形浄瑠璃文楽の物語（ストーリー）の面白さと芸能としての特色を伝えるグッズとして、文楽絵本を製作した。取り上げた作品は『生写朝顔話』である。

キーワード：人形浄瑠璃文楽，デザインワーク，絵本，生写朝顔話